

# 意思決定支援

本人部会

金子良子

今年の本人部会は『コロナ禍でも楽しもう　くところて利用者の本音は？』をテーマに取り組み、本人部会委員が発表を担当しました。

本人部会の名称もあり、利用者さんの意見を聞いていきましょうから始まり、動画を使い利用者さんの意見や感想を発表し、そこから見えてくる課題等に取り組みことにしました

一、 コロナ禍で様々なことに制限がかかり、その中で利用者さんはどう感じているのか、嫌だったり我慢したことなどを聞いていく。

二、 コロナ禍で職員が実践してきたことに対してどう感じているか本音を聞き取りたい。

三、 利用者さんのこれからの希望を聞き取る。

発表者一 ラポール川原（一対一の対面で聞き取り動画使用）

キーワード 『コロナが奪った利用者さんの生活と、これからやりたいこと』

利用者さんの発言 嫌だったこと等はバス旅行がなくなった、販売に行けない、レクリエーションがなくなった等経験の中から多くの発言が聞かれた。

楽しかったことは、事業所が企画してくれたことを楽しんでいる発言や仕事が減ることなく続けられることに喜びを感じている発言が聞かれた。

これからの希望としてレクリエーション活動に参加したい、食事に行きたい等の経験の中からの希望が多く発言された。

事業所の活動は「人数を絞っての外出」「事業所内でのお楽しみ企画」等、コロナ禍で利用者のストレスが溜まらないよう努力されていた。これからも事業所として出来る事を続けたいと発表された。

発表二 テラス・きらっと（一対一の対面で聞き取り動画使用）

キーワード 『コミュニケーション』

聞き取りを通して利用者の感じていることを確認する。

利用者さんの発言 困っている事等は、マスクが嫌い、マスクで耳が痛い、仲間と部屋が分かれてしまった等の発言があり、事業所が利用者さんと話し合いを重ね解決された報告が聞かれました。

現在の思いは、ピンクマスクで仕事頑張る、一人スペースでマスクを外すことが出来良い、仕事があって安心等でした。

みんなの思いとして、バス旅行が楽しみ、誰かと一緒にお出かけしたい、イベント等が次々なくなり「まただねの声」も・・・

コロナにどう対処すればいいのか今も悩んでいる。今回聞き取ったことで利用者さんの感じていたことが改めて確認できた。しかし、利用者さんの発言の表面に見えている事だけでなく、裏面に隠されている部分にも耳を傾ける必要がある。コミュニケーションを取ることが大事と発表された。

発表者三 グループショップぱれっと（管理者による発表）

キーワード 『安心・安全・溶く』

「安心」作業時間前後一時間短縮 短縮による工賃不足を「時間短縮助成金」を導入し現状維持に努めた。

「安全」作業場の整理整頓で密にならない環境づくり  
「溶く」①シトラスリボンの制作・配布 ②閉塞感を払拭し、気持ちを明るくし、健康な心の維持のための試み

障害により味わえなかったこと、経験したことが無いこと、触れ得なかったこと等を実施することにより、個人が忘れたもの、落としたものを見つけ思い出すことに繋がっていると発表された。

発表四 ラポールみなみ（利用者会議の中での聞き取り動画使用）  
キーワード 『本音（本当の願い）主体（自己決定・自己選択）  
生き生きと暮らす』

聞き取りから、意思決定支援・自己選択・自己決定等を進めていくために必要なことは何かを探っていた。

（利用者会議 月一回開いている利用者さんの希望を聞く会）利用者さんからはマスクがづらい・外出の制限がづらい等の発言が聞かれ、事業所の実施したお楽しみ企画については楽しかったの感想のみで批判的な声は聞かれなかった。これからの希望については職員と販売に行きたいとレク以外の発言も聞かれた。

自己選択・自己決定の前提は「伝えたい、伝えよう」の気持ちが育つこと、そのためには成功体験の積み重ねや安心して選べることや、気持ちを伝えられる環境づくり等が大切。そして意思決定支援の課題として利用者さんの願いを日々の生活や行事に反映して、生き生きとした暮らしを実現したいと発表された。

発表五 本人部会委員杉山氏

杉山氏からは本人部会が出来た経緯が話された。当事者が研修会に参加することが無い、当事者の存在が必要ではないかと、ただ、わの中で当事者の声を聞くことは浸透していなかったが今回オンラインで声を聞くことが出来便利になったと感じたと話された。

ご自身がコロナに罹り障害のある人に対するコロナの情報発信や事業所の説明不足を感じたとのこと。オンラインによる情報交換の

仕組みをさらに強化していく必要ありとも話された。

意見交換の中で杉山氏は、これまでに無いことを経験している。周りの人は今まで当たり前前に出来ていたことがコロナになり制限がかかった。障害があるとそういうことばかり、コロナの中、みんなが苦勞を共通して経験している。

新しい生活様式、作業所から提案できるチャンス。

福祉の役割、新しい何かを生み出す、世の中に提案する、賛同者をつくる、新しいサイクルを生み出す等、その中で障害者の意思決定支援が繋がっていくと話された。

その他、意見交換では四事業所の方に感想・取り組み等を発表していただいた。

経験が減ると選択肢が狭まり自己決定する幅も狭まってしまう、このマイナスになってしまう状態をどうしたら良いのかの不安があるとの意見がありました。

どの事業所も様々な取り組みの努力をしていて「こうすればいいよね」等の前向き思考で取り組んでいる発言が多くありました。

利用者さんの本音をどこまで聞き出せたかは難しいと感じていますが、発表を通して職員が利用者さんに丁寧に意見や感想を聞き取っていったことの積み重ねが意思決定支援に繋がっていくと考えます。

# 就労支援部会報告

社会福祉法人みどりの樹

寺田 志のぶ

「支援者としての葛藤」

「多様な立場から「はたらくこと」の支援」を考える  
～  
昨年度、就労支援部会では所属法人の次代を担う立場の3名の職員が、障がいのある方たちの『はたらく』ことを支える中で何を大切にしていくなかを、所属法人の成り立ちや理念を通して振り返り、自身の根幹となる信念や誇りを再確認しました。

私たちは日々の業務の中で、揺るぎない信念を持つ一方で、常に直面する課題や制度との間で葛藤し、答えを見失うことも多いのが現実です。昨年度の3名のように、私たちには原点に立ち返り、思いを共感し、それを次の支援へと体現するための「答え合わせの場」が必要であると整理しました。

作業所連合会がその「場」を求める職員たちの受け皿となるため、今年度この就労支援部会においては、「生活介護事業所で『はたらく』ことを支援する意義に悩む若手職員」と、「A型事業所だからできる『はたらく』ことへの支援の誇りと価値に悩む中堅職員」という話題提供をもとに、障がいのある方の『はたらく』をその後の全体討議で深掘りしていきました。

事業形態に違いはあっても障がいのある方たちにとって『はたらく』ことは生活の中心であり、社会との接点であることに違いはありません。必ずしも答え合わせに正解があるわけではないですが、日々葛藤しながら働く職員にとって、現状を見つめなおし、課題を浮き彫りにし、自らの言葉で外部に提言する過程にこそ意義があり、そのことが個々の支援の質の向上につながることに、所属法人全体の価値を高めていくと考えます。

発表者① 社会福祉法人みどりの樹 斉藤麻子

「生活介護事業所ではたらくこと」の支援をする際の葛藤  
はたらくことを中心とした生活介護において、トイレにこもってしまったりAさんのケースをきっかけに、「はたらく」ことの支援について考えました。

まずは、Aさんへの理解を深める為に、ケース検討会を行い、そこでの話し合いを通して支援を行いました。その結果、Aさんが「はたらく」ことへの想いを探ることができました。

次に、事業所の歴史を知り、「はたらく」ことを中心とした事業所となった理由を学びました。そのことを通して、地域社会の中で生き生きと生活するために「はたらく」ことの重要性を再認識することができました。また、一人ひとりに担当や役割があり、一人ひとりが輝けることがあるということが、利用者さんの居場所につながっていると感じました。

最後に、研修参加者の方々から、はたらくことへの支援についての想いをお聞きしました。皆さんが、葛藤しながらも支援を行っていることに改めて気づくことができました。

発表全体を通して、葛藤すること自体に価値があると学び、皆さんと共有することで、前向きに、元気になる自分に気づきました。今後も葛藤し、それを言葉にして、他の支援者の方々とも共有していこうと思います。そうすることを繰り返しながら、利用者さんの「はたらく」ことへ想いを考え続けていこうと思えました。

発表者② NPO法人 地域生活応援団あくしす 堀米美紀

「A型事業所だからできる はたらくことの支援を考える」

前年度の作業所学会分科会では、一般就労と就労継続支援A型のサービスとの差別化やそれぞれが担う価値などが曖昧になりつつある自分や、A型事業所としての役割への悩みを発信しました。様々な法制度や世の中の状況は目まぐるしく変化していきます。一方で事業所として、支援者としての「思い」の根幹は変わらない・変えてはならない部分があります。発表をさせていただくことで、またその準備を進めていく中で、そういった狭間とひずみを再認識することができました。

そして今年度は、全Aネット（就労継続支援A型事業所全国協議会）の研修へ参加し、A型事業所としての現状や、利用者・支援者・運営および経営：それぞれの立場が抱く思いはどこにあるのか、様々な事業所の話を聞き、現状を見つめなおす機会づくりを行いました。

「経営と運営」目的の異なる2つが存在するA型事業所の法制度とのひずみを感じる言葉は少なくなく、A型事業所の立ち位置の不明瞭さや、雇用と一般就労への移行サイクルの滞りに葛藤を抱く声を聴くことができました。「稼ぐ」ことを重視していかねばならない時代背景に葛藤が生まれ、そして同時にこの葛藤はB型事業所とも相まみえる点であることに気づきました。

分科会では「就労支援」という観点から事業形態に囚われずに、法制度など変わりゆくものに対してどう働きかけていくのかを参加者の皆様に伺いました。意見交換を通し、同じ葛藤を抱いている声に触れることで、法制度に柔軟に対応することは忘れずに、しかし時には声を上げてそのひずみに訴えかけていく動きを起こしていく必要性を実感しました。

今回、分科会発表の準備を進める中で、様々な立場の意見の中にも、共通の葛藤や思いを見出すことができました。時代の変化の中で、自分たちの理念やミッションなど思いの根幹を貫くためにも、

状況の客観視と分析を行い、法制度に訴えかけていく意識を持ち続けたいと思います。

### 3、まとめ

事業種別で考えると比較的B型事業所の多いこの連合会の中で、生活介護やA型の事業所の発表をしてもらいました。そして、発表者2名の発言について明確な結論に至っていない、ということが今回の分科会のねらいでもあります。

2名の発表の後、参加者から意見を伺うと、所属する事業所の事業種別、ご自身のこれまでの経験などにより、多種多様な意見がありました。一方では、「生活介護だから」と事業種別にとらわれすぎてしまうのではなく、ご本人の「はたらく」にどう寄り添うかということ、もう一方では、「A型であることにどうこだわり抜いていくのか」というように、制度を見つめ、時には制度を変えるべく訴えかけていく必要もある、ということ等が議論の焦点となりました。さまざま意見がある中でも共通していたことは、みなそれぞれに葛藤していることがあるということ、その中で迷いながらも大切にしたいことを考え、日々の支援に取り組んでいるということではないでしょうか。また発表者からは、みなさんの意見を聴いて、葛藤しているのは自分だけではないと知りほっとしたという感想がありました。

今回の分科会では「葛藤すること自体に価値がある」とまとめました。葛藤している自分に気づき、その先のアクションにどうつながり、それがどう質の向上につながっていくのか、その過程を大切にしたいと考えます。

次年度以降もこの分科会が、障がいのある方とはたらくみなさんにとって、引き続き発表の場、答えを見つめる場、活発な意見交換の場となることができればと考えます。

# 地域生活支援

地域生活支援部会

加藤 明成

皆さんは、自身が所有している自動車があるとして、何年位その車に乗り続けますか？中古車？新車？最近では世界の諸般の事情に伴い、その購入にも影響があるとは思いますが。私が世話になっている販社のベテラン営業担当者曰く、狙った新車が欲しいなら、一年前に言ってもらわないと…とのこと。「一年も先の自家用車のことなんてわかんない」という旧来の感覚は今の自動車業界には、もはや通用しないのが現状のようです。因みに、私自身、自家用車はメンテナンスをしながら、長く乗るものだと決めていきます。走行距離・年月もそうです。また長く乗ると歴史が刻まれ愛着も湧きます。我が家の三菱のSUV（平成十九年新車購入）は十六年が経ち十四万キロ以上走行、もう一台のダイハツの軽のオープンカー（令和元年購入、平成十五年新車登録）は車齢二十年（走行距離約七万キロ強）です。

作業所連合会で、利用者の方における、最近の永年表彰をみれば、十年、二十年、三十年と、その永きに渡る営みを感じ得ることが出来ます。ホントに凄いことです。でも、それだけの年月が経過しているということは、例えば、自宅（家族と同居）から、無認可時代からの通い慣れた作業所に通所していたとして、保護者の高齢化に伴う不具合が家庭内に生じ、これからの家族の暮らし方を再検討することになり、いつなってもおかしくないということでもあります。

保護者の方は介護保険の制度を色々と利用することになり、なるべく在宅での生活が営めるように、ケアマネージャーがサービスを組み立てていくでしょう。さてでも、永年作業所に通所してきた、私たちの古き仲間、どうでしょうか。市役所のワーカーや計画相

談の事業所の担当者等が今まで通り、家族と同居して暮らせる手段を熟考していると思います。しかし、それが困難だと判断せざるを得ないとなった時、本人に永年寄り添った私たち作業所の職員には何が出来るのでしょうか。「生活のベースはグループホームに移行しましょう。」もしかしたら従事する、同一法人で運営するグループホームかもしれません。

「生活のベースは入所施設に移行しましょう。」今回発表していただいた「伊豆つくし学園」の内田先輩も仰っていたように、地域における入所施設の役割は、なにもいわゆる「入所」だけではありません。ショートステイ、日中一時、日中時間帯の生活介護事業所等多岐に渡ります。「ショートステイの利用で慣れている場所ですから。」確かにそうです。地域で様々なサービスの利用を併用してきた経験がそこには活かされています。

「入所施設へ移行ですから、作業所は卒業ということでは？」もしそういう話になった時、「しょうがないね。」と通所を諦めてしまえますか？「作業所で仕事を続けたい。」と本人が言っているにも関わらずです。

例えば、移行する会議で作業所の職員に出来る事は微力だけだと思いますが、そのためには他事業所（入所施設）の苦労を知識だけだとしても知っていなければなりません。

EU（欧州連合）では、二〇三五年から実質的にエンジンの新車販売が禁止されることになったそうです。しかし、そんな急激に電気自動車等のみに移行出来るのでしょうか？私はもつと緩やかであるべきだと思っています。やっぱし、長いや永いは大切だから。